

No.3102

冷戦期東アジアにおける「境界」管理 ―大村収容所を中心に―

一橋大学大学院 社会学研究科 フェロー

李英美

本研究の目的は、第二次世界大戦後の東アジア地域において、「不法入国者」の収容・送還を担った入国者収容所である大村収容所を事例に、人の移動に伴う出入国管理(法案及び政策)の諸問題を、政策的背景にとどまらず、当時の社会状況との関係性に着目しながら、収容所が運営されていた社会的条件をも捉えることである。とくに本調査では、国家による「密航」管理体制の拠点となった九州地方および長崎県大村を中心に重点的な調査を実施した。

本調査では第一に、大村収容所を舞台とした児童作文及び教育映画『日本の子どもたち』(1960)を事例に、地域レベルにおける「密航(者)」像をめぐる言説・表象が構築されるプロセスの一端を明らかにした。「密航」を主題とした児童作文を中心に、教育をめぐる地域資料の発掘及び収集に努め、戦後長崎県において「密航者」をめぐる言説がどのように立ち上がり、地域社会のなかで顕在化したのかを検討した。本事例では、「密航(者)」との関わりが地域社会のなかで「友好／交流」の物語として収斂していくことで、「密航者」という存在が周縁化される側面を考察することができた。

第二に、地方行政レベルでの出入国管理政策の展開を踏まえつつ、1950年代の「密航」問題に対峙する地域住民の姿を捉える史料群を渉猟することができた。それは、地域住民による平和運動、生活改善運動に関する記録や、占領期の新興新聞など多種多様なローカルな地域史料群である。これらを網羅的に検討することで、九州地域の沿岸部における摘発や監視など「密航者」管理の源泉に、失業や経済苦といった生活の課題を含む政治・社会的な状況があることを把握することができた。以上をつうじて、東アジアを中心とした冷戦の構造および戦後日本の出入国管理行政の展開が、地域社会における人々の意識及び行動に及ぼした影響の一端を明らかにすることができた。